

編集後記

1980年代の冒頭は、ただいま最も関心の深い問題の1つである「リハビリテーション医学教育」を特集した。昨春第16回日本リハビリテーション医学会総会において、専門医制度設置の件が提案され、時間の関係で充分討議を尽くすことができず、継続審議となった。専門医制度は、卒後教育と深くからみ合った問題であり、いわば車の両輪のような関係にある。すでに何回か論じられた医学教育の問題を再度採り上げた理由もここにあり、わが国の卒後教育の現状を十分に踏まえた上で、専門医制度に対する各自の心構えを作っておいていただければという編集者の願いが籠められている。

上田氏は、リハ医学会医学教育委員であり、日本のリハビリテーション医学教育の抱えている問題点を全般的に総括し、ことに専門医設置の重要性を論じた。

大川氏の「卒前教育の現状」は、横浜市大の実地体験から割り出されたもので、まず医学生をリハの現場に連れ出すことが大切であると述べている。

明石氏の「卒後研修」では、わが国リハの歴史的発展と現況を述べ、1日も早く専門医制度が発足することを祈ると結んだ。

千野氏は、「リハ医学における研究」と題して、リハ医学は「障害学」であり、人間性の復権を基本としていると述べ、従来の医学

の領域で行なわれてきたこととは違う独自の研究分野をうち立てるべきであると力説した。

座談会「卒後教育のあり方と将来への指向」は、今後のわが国リハ教育の中で、卒後教育の種々のあり方が論議されてゆくうちに、話題は期せずして専門医制度へと集中し、熱心な議論が展開された。

講座は、松田氏の「脳卒中の成因としての血液凝固系の変化」、谷本氏の「リハ医学における呼吸の生理学」等教えられるところの多い力作である。

その他岡部氏の「日本健康人の関節可動域」は貴重な資料として今後の研究者に裨益するであろう。

巻頭言で山形氏が、プライマリケアの中でのリハビリテーションの位置づけを取り上げて下さったことは、リハビリテーション側からのプライマリケアについての最初の発言であり、重要な提言である。

1980年代は、経済低成長の時代として、すべてにおいて引締め政策の気運がうかがわれる。リハビリテーションのみならず、総花的な拡張の時代は終わったものとして、本当に必要なものは何であるかという地についた論議が真面目に行なわれるべき時であると思う。

(土屋 弘吉)

次号予告 (第8巻第2号)

巻頭言	1980年代のリハビリテーション医学……………慶大	千野直一
特集	失調症の分類と症候論……………産業医大	山下順章・他
	運動失調の神経生理……………神経研究所	島村宗夫
	失調症の障害評価と薬物療法……………名大	間野忠明
	失調症の理学療法……………東大	間島満・他
	失調症の作業療法……………九州労災	吉田隆幸
講座	脳卒中(2)(脳出血, 脳梗塞, くも膜下出血の成因と病理 1. 高血圧性脳内出血)……………群大	吉田洋二
	リハビリテーション医のための呼吸器入門(2)(呼吸の運動学)……………川崎医大	土肥信之・他
一頁講座	リハビリテーションと法律(2)(診断書)……………宮城県拓杏園	今田拓
研究と報告	成人二分脊椎者(16歳以上)の子後……………神奈川リハセンター	石堂哲郎・他
	私たちが行なっている二分脊椎の早期治療……………新潟はまぐみ学園	乗松尋道・他
	理学療法部門における視力障害者の業務内容に関する一経験……………慶大	藤沢しげ子・他
	“腰痛”に対する骨盤ベルトの試み……………長崎三菱病院	田島直也・他
学会報告	第24回関東地方リハビリテーション医学懇話会……………慶大	千野直一

編集顧問

天児民和
大島良雄
小池文英
杉山尚
砂原茂一
津山直一
水野祥太郎

編集委員

明石謙
上田敏
大井淑雄
大川嗣雄
千野直一
土屋弘吉
横山巖

編集同人

赤津隆
今田拓
今村哲夫
江口壽榮夫
荻島秀男
小野啓郎
加倉井周一
河邨文一郎
五味重春
斉藤正也
沢村誠志
武智秀夫
永井昌夫
中村隆一
野島元雄
間得之
長谷川恒雄
橋倉一裕
福井関彦
三島博信
渡辺英夫
飯田卯之吉
田中照子
小川孟
野村敏
小島蓉子
笹沼澄子
鈴木明子
高田玲子
林玉子
土屋和夫
松村秩
(以上五十音順, 敬称略)

(細田, 山田)